

実践6 「あこがれのカナヘビさん」

概要 あこがれのカナヘビを飼うこととなり、心臓の動きを実感し、生きていくためには生餌をあげなければいけないことに直面する5歳児。葛藤や表現など多様な体験をして興味と愛着を深めていく実践です。

ポイント 子どもの心の動きを読み取り、今何が育っているか、その育ちに添った環境構成や保育者の援助につなげています。命のつながりで葛藤する子どもたちの思いに寄り添い、子ども同士が納得するまで考え合う姿を大切にしています。生き物への愛着、感謝、表現など「科学する心」につながる豊かな体験が読み取れます。

姫路市立中寺幼稚園

5歳児

4月下旬、小学校の校庭でカナヘビと出合った。今まで見たことがない生き物と出会い、しっぽの長さや素早い動きなどその形や動きに心を動かされ、一気に興味が広がっていった。カナヘビの色や模様、しっぽの長さなどの大きさを記憶しており、子どもたちの観察力に驚かされた。子どもたちは、カナヘビをどうやって見つけようか考えたり、餌を調べたり、探したりしながら興味を深めていった。餌への興味から他の生き物への興味も広がった。保育者は、虫眼鏡や図鑑など自分たちで調べられる環境を用意した。

・・・心の動き

場面1：「あこがれのカナヘビさん」

①気づき・発見 ②発見 ③伝達・共有

5月下旬のある日、Aさんが家でカナヘビを捕まえ、園にもってきた。みんな憧れのカナヘビを目の前にして大興奮！飼育ケースの周りを取り囲み①「目がかわいい」「しっぽ長いな」など特徴を観察しながら熱心にカナヘビの様子を眺めていた。「もっと詳しく見てみる？」と保育者が観察ケースを用意すると、観察ケースを覗いて②Fさんが、「カナヘビの心臓ドクドク動いてる」と言った。③他の子どもも「ほんまや！動いてる」「生きてるってことやな」と共感していた。「カメックス」と名付け、学級で飼うことにした。



【考察】 春から追い求めてきたカナヘビに出会い、子どもたちは大興奮で、食い入るように見ていた。虫眼鏡や観察ケースでカナヘビを覗いた時に、肌の質感や目の大きさ、手の形など観察したが、子ども達の中で一番印象に残っていたのは、心臓がドクドクと波打っている姿だった。以前バッタやダンゴムシなどの虫は虫眼鏡で見たことがあったが、目で見て心臓が動いていると分かったのは初めてだったので、生きていることを実感し、印象に残ったのだと思う。また、自分たちで名前を付けることで一層愛着が湧いてきたのだと思う。

場面2：好きな食べ物何やら

①疑問 ②試行・探求・調査 ③試行・反復・調査
④探求・広がり・深まり



カナヘビを捕まえてきた①Aさんが「カナヘビなんの虫食べるか分からへん」と困っていた。以前図鑑で調べたので、カナヘビが食べる物は虫だと分かっているが、どんな虫でも食べるのか、何が好きなのか、分からなかったので調べてみることにした。しかし、調べてみるが図鑑にもネットにもあまり詳しく書いていなかった。「一度カナヘビさんにあげてみたら？」と保育者が伝え、②実際にカナヘビに様々な種類の虫を与えて食べる様子を見た。

まず、アリやミズ、ダンゴムシなどをカナヘビに与えてみるが、全く反応せず食べなかった。子どもたちは「あれ？アリ全然食べへんな。好きじゃないかな？」と不思議そうに見ていたが、③「じゃあ次は何あげてみよ？」とカナヘビの反応に興味津々だった。次にガをあげてみると、ピクッと顔を動かして反応したが、食べはしなかった。

ある日、体育館から帰ってくる時にクモを見つけた。④「このクモ、カナヘビにあげてみよ！」と持って帰ってカナヘビに与えてみると、目の前でパクッと食べた。「カナヘビがクモ食べた！」と子どもたちは大喜びだった。その後はカナヘビが食べてくれるのが嬉しくて、小虫を見つけては、カナヘビに与えようとする姿が見られた。

【考察】 子どもたちは、カナヘビが餌を食べない現実に直面して、最初は困っていた。しかし、まずは何でも試してみたらよいことが分かると、自分たちで考え、試行錯誤しながらやってみようとする姿が見られるようになった。なかなか食べる虫が特定できなかった分、カナヘビがクモを目の前で食べた時の喜びは大きかった。

場面3：「カマキリの赤ちゃんどうしよう」

①伝達・共有 ②気付き・発見 ③伝達・共有・広がり・深まり
④反復・探求・共有・深まり ⑤深まり・納得



ある日、①Cさんが、カナヘビの餌にするためにクモを持ってきた。すると②Dさんが「でも、クモさん食べたらかわいそう」と言った。その一言をきっかけに③クモを逃がす派とエサにする派でクラスが真っ二つに割れ、最後は、見つけたCさんが決めた。

数日後、Aさんが戸外遊びの時にカマキリの赤ちゃんを見つけた。そして、④「発表タイムでカマキリの赤ちゃんをエサにするかみんなで決めたい」と言ってきた。

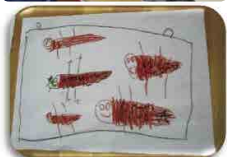
④最初は、「育てて、大きくなったら食べたら？」など新しい意見が出たり、前回と変わらず逃がす派とカナヘビのエサ派にほぼ同じメンバーで分けられたりしていたが、「カマキリまだ赤ちゃんやで。お母さんおるやろうからかわいそう」「昨日もクモあげたやん。もうお腹いっぱいやで」など逃がす派の意見を聞いているうちに、「やっぱりよく逃がす方にする」と意見が変わる子どもが出始めた。

逃がす派は多くなったが、まだ納得がいっていない子どもがいたので、最終的に今回もカマキリを見つけたAさんに決めてもらうことになった。Aさんはカナヘビを最初に捕まえ一番よく世話をしていたので、クモの話し合いでは、カナヘビのエサにしたいと強く主張していた。⑤悩んだ結果、Aさんは逃がすことを選択し、初めてエサとして捕まえた虫を逃がすことになった。そして、カナヘビのエサ派の子どももAさんの意見を聞き、素直に受け入れ納得していた。

【考察】 一つ一つの命と向き合って、命の大切さを子どもたちなりに考えた。今回は、最初は意見が分かれたが、友達の意見を聞いて自分の意見を変えることができる子どもが増えてきた。特にA児に関しては、事例5の話し合いでは「カナヘビが死ぬのは絶対嫌や」とカナヘビのエサにしようとして強く主張して譲らなかったの、教師は今回もカナヘビのエサにしたいのだろうと思っており、逃がす選択をしたことに驚いた。

場面4：「ありがとう。カナヘビさん」

①気付き・発見 ②疑問 ③調査・探求・伝達・共有
④納得 ⑤気付き・伝達・広がり



7月に入り、急に暑くなってくるとカナヘビが立て続けに2匹死んでしまった。最初は「寝てるだけちゃう？」と死んだことを認めたくない子どももいたが、①Fさんが「もう、心臓ドクドクしてないで」と言ったことでカナヘビが死んでしまったことに気づき、悲しんでいた。しかし、②エサを与えているのに食べずに死んでしまったことに疑問を覚えた子どもたち。③みんなでなぜ死んでしまったのか考え合った。

「(エサが)クモじゃなかったからじゃない?」「でも、前はバッタも食べてたやん」「水が少なかったのかなー?」「暑かったのかな」と様々な意見が出たが、④Dさんが「もう逃がしたげよ」と言った。不思議と反対意見が出ず、「うん」「逃がしたげよ」とみんなでカナヘビを逃がすことに決めた。逃がす時になると、少し寂しがっている子どもがいたので、「じゃあ、最後にカナヘビさんの絵描いてさよならする?」と保育者が言うと、Fさんが「うん! そしたら、絵見てカナヘビさん思い出せるもんな」と言い、他の子どもたちも同意してカナヘビの絵を描くことにした。

絵をかき始めると⑤「見て! みんなかいた!」と死んでしまったカナヘビも入れて描いたAさん、カナヘビが好きなクモと一緒に描いたJさん、「舌を動かしてエサ食べてるところ」とカナヘビの特徴を捉えて描いたBさんなど、それぞれ愛に溢れた絵を描いていた。

【考察】 最初は大好きなカナヘビが死んでしまったことを認めたくない子どももいたが、F児の発言で、「最初にカナヘビを虫眼鏡で見た時はドクドク動いていた心臓が、動かなくなっていること」に子どもたちは死を実感した。立て続けに飼っていたカナヘビが死んでしまったことを悲しみ、疑問を覚えた子どもたちはD児の発言をきっかけに、このままでいいのか、逃がしてあげた方がいいのではないかと考え始めた。自分たちはもっと飼ってみたいが、カナヘビにとって良いのはどちらだろうか、とカナヘビの立場に立って考えることができるようになっていた。みんなの心が一つになり、逃がすことに反対する子どもがいなかったのだと思う。また、最後に描いた絵は死んでしまったカナヘビも一緒に描いてあったり、いつもは少し絵が苦手な子どもも丁寧に色が塗ってあったりして、カナヘビに対して感謝や愛情の思いが強く感じられた。